

熊本 SJCD 例会抄録

演題 インプラント2本を用いた無口蓋の磁性アタッチメントオーバーデンチャーの一症例

演者 古田 洋介

日付 2013年3月26日

KEYWORDS

1. インプラントオーバーデンチャー
2. 磁性アタッチメント
3. コンビネーションシンδροーム

従来の総義歯に比べて、無口蓋義歯の利点は大きい。

一般的には、義歯を装着することによって、嘔吐反射を伴うような不快感がある場合に、顎堤の条件に恵まれたケースで適応となる場合がある。

しかし患者によっては、嘔吐反射はなくても、装着感の良さや食事の美味しさを求めて、無口蓋義歯を希望する患者もいる。

しかし、口蓋を大きくくり抜くほど、義歯は脱離しやすくなるので、くり抜く量や顎堤の条件によっては、インプラントを利用した維持が必要になってくる。

そこで、無口蓋義歯に2本のインプラントを用いた場合、どのような治療計画と補綴設計を行えば、最大の効果を発揮できるのか？

とくに、口蓋のくり抜き量の目安は、これまで何の基準もなく適当なところで決めていたが、今回は自分なりに基準を決めて、患者の協力の下で実験的に限界点を探ってみた。

諸先生方のご意見をよろしく申し上げます。